定時運航で実現する環境保全

公共交通機関の基本品質である「定時運航」。
定時に運航することで
お客さまの時間を大切にするとともに、
消費する燃料を削減する、環境にもやさしい取り組みです。
定時運航へ向けた、JALグループの社員一人一人の
きめ細やかな取り組みをご紹介します。

定刻に出発することで守られる自然環境

旅客機が定時に出発し、スケジュールどおりに目的地へ到着することは、お客さまの時間を無駄にせずご予定を守ることと同時に、環境にもよい影響があります。

例えば、出発予定時刻を過ぎても出発準備が整わず、補助エンジン（APU）を回したまま待機すると、ボーイング777型機で1分あたり、約13キログラムもの余分なCO_2が排出されることになります。また出発が遅れてしまった場合、同機が3分の遅れを取り戻すためにスピードを上げると、およそ430キログラムのCO_2が余分に排出されてしまいます。

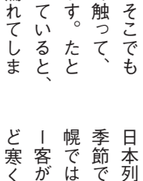
目的地の空港や航路の混雑、天候など、出発後も定時運航に影響を与える阻害要因は多数ありますが、まず定刻に出発することが定時性を確保し、環境負荷を少なくするための大前提となります。

今回は豊かな自然が残る北海道の玄関口、新千歳空港で実際に行われている3つの取り組みを、社員の声を通してご紹介していきます。

取り組み1
手作りの手荷物計測器でお預かりにかかる時間を短縮

「新千歳空港から秋田空港や花巻空港行きの便で使用されることの多い機材は、JALグループが保有する機材でも小型機に分類されるCRJという50人乗りの機材となります。こうした小型機は、ボーイング777型機といった大型機と比較すると機内の手荷物収納スペースが小さく、大型機材では収納可能な手荷物であっても小型機では収納できず、お客さまにご迷惑をおかけしてしまうケースも発生しております。

機内に手荷物を収納できるスペースがない場合は、貨物室にてお預かりすることとなりますが、その際は手荷物票の作成、また貨物室への搭載などが発生し、こうした作業が遅延に繋がるケースも少なくありません。しかし口頭や画像による説明だけでは、ご自身の手荷物が機内に収納可能かどうかイメージできないという問題に気づき、手荷物収納棚の実寸大模型を作成することになりました」（千歳航務部・大島昇明）



「整備スタッフの協力により、この手荷物収納棚模型（通称『ラッくん』）ができたおかげで、お客さまからもわかりやすいというお言葉をいただき、スムーズに手荷物を預けてくださるお客さまが飛躍的に増えました。

ただ『ラッくん』の弱点は重くて持ち運びが困難な点であり、より多くのお客さまにご利用いただける方法はないか知恵を絞った結果、手荷物にかぶせてサイズの確認ができる計測器（通称『かぼ』）が誕生しました。

手荷物お預かりカウンターでドライアイスの有無を確認。（千歳旅客部・河田歩実）

今はゲート前に『ラッくん』と『かぼ』をセットで置き（あわせて通称『かぼ&ラッくん』）、アナウンスにてご案内しているのですが、さらに多くの方にご利用いただいております」（千歳旅客部・中山梨香）

取り組み2
一つ一つの手荷物を手で触り確認

「航空機は安全運航のため、貨物室に搭載される手荷物にドライアイスが含まれる場合は、機長に報告する必要があります。札幌ではドライアイス入りの新鮮な魚介類のお土産も多いため、受託手荷物としてお預かりする際は、細心の注意を払っております。お土産袋は必ず手で触って中身を確認しておりますが、その際の感触で袋に霜がついている場合、ドライアイスが入っていることが多いのです。

一方、ドライアイスではなく保冷剤が使用されているケースも多くあり、お客さま自身で見分けることは難しいため、その際はレシートを見せていただき、こちらからお店に電話をすることで、確実な確認をしています。

万が一、手荷物を航空機に搭載したあとに確認が必要となった場合、大幅な遅延に繋がるのみならず、安全運航の阻害にも直結するため、五感すべてを使って確認するよう心掛けています」（前出・中山）

「このように旅客スタッフによって非常に細かく確認が行われた後、お荷物が手荷物集荷場へ運ばれてきますが、そこでも搭載スタッフが一つ一つ手で触って、再度徹底した確認をしています。たとえ保冷剤だとしても霜がついていると、ほかのお客さまのお荷物が濡れてしまう可能性がありますので、水滴がついているものは袋にお包みするようにしています。ドライアイスや荷物の水漏れなどが出発直前に発覚した際は、出発遅れに繋がってしまいますので、事前防止に努めています」（ランプサービス6課・千葉涼太）

高さ10メートルにいる作業者と運転者の息の合った連携により、確実に航空機の除雪作業を実施。

取り組み3
安全運航を守る雪・霜への対策

「4月といえば日本列島は春の季節ですが、札幌ではまだスキー客が訪れるほど寒く、現在も雪や霜の対応を万全に行っています。

安全運航を堅持するため、雪への対応は整備作業でも一段と高度な技術が必要です。除雪作業は高さ10メートルの作業車に乗って、作業者と運転者の2名で行いますが、雪の程度などによって防氷液を吹き掛ける時間や除雪を始めるタイミングが異なります。また降雪時に航空機に散布する防氷液の効果には時間制限があるため、少しのミスで、再度除雪作業が必要となり、出発時間の遅れに繋がる恐れがあります。

人間が最も恐怖を覚えるといわれる約10メートルの高さでも確実な作業ができるよう、私たちは8月から準備を開始しています。除雪作業の腕を磨くことにより、航空機の定時運航に加え、適正な防氷液散布による環境負荷の軽減にも繋がりますので、使命感をもって仕事をしています」（千歳空港整備部・黒﨑仁志）

JALグループは、これからも安全運航を前提に、環境保全にも繋がる定時性向上に取り組んでまいります。

お客さまの手荷物が機内収納可能か確認できる『かぼ＆ラッくん』を特定の搭乗口に配備。